

「数えてみよ、主の恵み」

詩篇103篇1-5節

森島 牧人 牧師

新年おめでとうございます。今年も主の恵みを覚えて主と共に歩んで参りましょう。

先週もお話ししましたが、私たちバプテスト派の教会も含まれる西欧の教会の暦では、私たちはすでに新年を迎えています。教会の暦では、一年間の神の恵みを覚えて感謝する感謝祭をもってその年を終え、翌週、主を迎えるアドベントの第一週の主日をもって新しい年が始まることになっています。そしてクリスマスシーズンはアドベント第一週に始まり、エピファニーの1月6日に最も近い主日、今年は1月8日までとなっていますので、今日は、まだ私たちはクリスマスシーズンにることになります。ギリシャ語からの言葉であるエピファニーは、異邦人に救い主・イエス・キリストが来られたことを記念して祝う日のことで、カトリックでは公現、聖公会では顕現と表記されているお祭りです。

ローマ帝国の東の方から広がったキリスト教ですが、ローマ帝国の分裂にによって、教会も東と西に分かれることになりました。その西方教会にカトリック、聖公会、そして私たちプロテスタントも属しています。エピファニーは東方教会で始まったもので、救い主が来られたことを公に示しているとして、主イエスのバプテスマ式を記念して祝われていました。四世紀になってそれが西方教会にも伝わり広がって行く中で、救い主の幼子を捜してはるばる訪ねて来た異邦の三人の博士の物語が異邦人への顕現・公現としてよりふさわしいのではということで、西方教会ではこれが大きなプログラムとなって行ったのです。

さてその三人の博士の物語、これはクリスマスの聖誕劇でよく演じられるもので、幼稚園児だった私も博士のひとりとして出演したことがあります。遠くからやって来た博士たちは馬小屋を捜し出して救い主である幼子を拝み、一人は王を象徴するものとしての黄金を、二人目は神を象徴するものとしての乳香を、最後の一人は主の人間としての苦悩や十字架での死を象徴するものとして没薬をささげ、喜んで自分たちの国へ帰って行ったのです。

聖書に記載されているのはここまでなのですが、実はもう一人博士がいたという伝説が残されているのです。その人は三博士同様星を見て救い主の誕生を知ったアルタバンという医師で、財産をすべて処分して一粒の高価な真珠を手に入れ、三博士と合流するため出発したのです。ところがその途中で病人と出会い、その手当をしたために遅れて三博士と落ち合うことが出来ず、後を追うこととなります。やっとベツレヘムに着いた時には、「ユダヤ人の王の誕生」と聞かされたヘロデ王が、国中の二歳以下の男児を全員殺させるということから逃れるため、天使のお告げにより幼子はエジプトへ去られた後でした。

この日からアルタバンは主イエスを捜し求める旅を続けることになりました。主のことを尋ねながら病人を治療し、貧しい人々に生活の糧を得る術を教える日々の中に歳月は流れて三十年が立ち、アルタバンは年老いてしまいました。そんなある日、彼は「イエスという人がゴルゴタで処刑される」という噂を耳にしたのです。「そのお方に違いない」と、アルタバンは大切にしていた真珠を持ってゴルゴタへ向かいました。

ところがまたしてもその途上、お金のため身を売らねばならない女と出会ってしまったのです。彼女を自由の身にするためアルタバンが真珠を手離したその時、主イエスは十字架の上で息を引き取られたのです。この時に起こった地震で建物の下敷きとなった瀕死のアルタバンの傍らには、主イエスの姿がありました。「先生、ずっとあなたを捜して来ましたが遅すぎました。あなたに差し上げるものは何もありません。」と言うアルタバンに対し主は、「そんなことはない。私は何度もお前と会った。お前が最も小さな者たちにしてくれたすべてのことは私にしてくれていたのだ。あの真珠も確かに私が貰ったのだよ」とお答えになったのです。

聖書にはないこの物語は、私たちがクリスマスを単なる祭りに終わらせないように、つまりこの日生まれた幼子の使命とキリスト者の使命について、私たちに考えさせるもののように思われます。私たちの生涯はキリストの姿を捜し求める旅と言えます。キリストの姿、それは教会の中のみではなく、私たちの周りの、病や孤独の中にいる人々、虐げられた人々の中にあります。そのような人々への私たちの惜しみない微笑み、愛の手、犠牲など・・・これこそが私たちの幼子・主イエスへのプレゼントということでありましょう。

私たちが生かされている今この時、深海で丹念に育まれた真珠のような主イエスの心を、私たちの心の中にお迎えしたいと思えます。

(説教要約 羽入田悦子)